

白子川 源流通信

2008年8月 第24号

- 魚道見学会
- 竹炭づくりの報告
- 大泉南小学校「白子川学習」に協力
- 活動報告
- 投稿「大泉に越した頃の話」
- 聞き取り調査「白子川の記憶」

「白子川源流・水辺の会」の会報誌



<白子橋> 萩原 和雄

魚の道

去年のいまごろ、白子川の上流域でアユらしい魚の群れが相次いで目撃され、驚いた私たちは夢中でシャッターを切った。やっぱりアユだったが、「みんなが川に興味もってくれば」と、よその川で捕ったアユを放流した人がいたのだ。■子どもの頃、故郷・多古町の小川に、サケがのぼってきて村中が大騒ぎになったことがある。大人たちは「サケのやつあ海から来たんだなあ」と大笑いして、この事件は終わった。太平洋から里山の小川までの、ゆるやかな流れがもたらした釣果だった。■白子川が新河岸川に合流する2km手前に白子橋がある。昔は江戸と武州の境

界だった。そのすぐ上に、白子川唯一の大きな「落差工」(段差)がある。これは、川の水路化・直線化によってできたものだが、魚はのぼれなくなった。人は「魚の道」を遮断したのだ。人はまた「人の道」をも、まどろんだり、よどんだりを許さず、速く効率よく整備してしまった。■古代から私たち人間は、魚や川や自然から、生活の糧や力や慰めをもらい続けているというのに…。おりしも、『八の釜憩いの森』が、外環道建設計画によって存亡の危機に瀕している。魚の道の確保と、八の釜のこれからに、こだわっていきたい。

(菅沢 博)

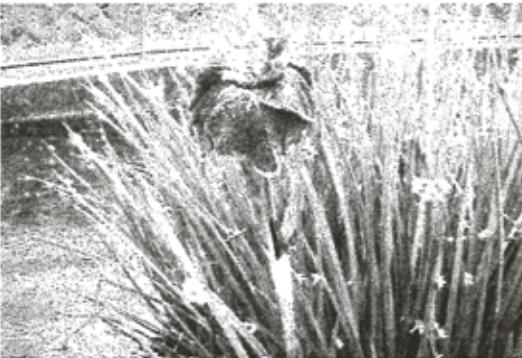
定例活動の報告

本田 純

■ 6月 <6月22日(日)>

雨の活動日になるのは珍しい。本降りではないものの、カッパを着て川に入る。水温計が防水タイプではなかったが、新調した防水型の電気伝導計に水温計も付いていたので、これで全計器が防水タイプになった。採水や測定では、かがむ姿勢のことが多い。計器を落としたり大変だった。これでその心配はなくなった。

気温は24.9℃、水温は18.0℃。案の定、水が滞留気味の最上流(木道先)での電気伝導度は、雨で希釈されて少し低めの219 μ S/cm。流れのある松殿橋上では、いつもの値に近い231 μ S/cmだった。梅雨らしい梅雨の真つただ中、水量が豊富で透視度は125cm以上、pHも6.3~6.4という典型的な地下水の値。



CODも0~2ppmと良好だ。火の橋下の流量は、170ℓ/Sと史上三位の水量だった。この豊富な水量に支えられて、夏の生き物が繁栄し始めている。今年も昨年と同じところにノナショウブが花開いた(写真)。

花のすぐ横でモノサシトンボと思われるものが羽化したばかりの姿でじっとしていた。ハグロトンボのオス・スジクロシロチョウも火の橋下で飛び始めていた。井頭橋上の右岸に群れを作っていたウキヤガラが左岸にも群れを作った。オオフサモに負けていない。

この日もっとも嬉しかったのは、南小4年生の一組の親子が木道に来て水深を計っていたこと。棒にメジャーが付いて

いて、先生が作ってくれたとのことだった。先生に脱帽。毎日計っているというので、「同じところで計ってね」とアドバースする。南小学校の4年生は、今年も総合学習で白子川を学び始めた。きたる7月2日は、学校に招かれて彼の前で川の話をする。彼の好奇心を満足させられるだろうか、気合いを入れ直した。

それにしても、今年始めカラカラに乾いてしまった井頭橋上だが、ホトケドジョウやギンブナの稚魚がたくさんいる。どこで遡っていたのだろうか。自然は謎に満ちている。

■ 7月 <7月26日(土)>

定例活動日は明日なのだが、私的な用事があって一日早く調査させてもらった。水が冷たくて気持ちよかった。カメラを忘れてしまった。オニヤンマらしき♂♀の交尾飛行、アオイトトンボ、オオシオカラ、シオカラ、ハグロトンボ、コシアキトンボ(?)などトンボ天国だった。クロアゲハがジッとしていたからシャッターチャンスだった。

気温は33.7℃、水温は松殿橋上の流れのあるところでも20.4℃と少し高め。電気伝導度はいつもの230 μ S/cm前後、pHは6.1~6.6。CODは松殿橋上で4ppmとちょっと高めだった。大腸菌群検査を2004年11月から続けているが、毎年冬季と夏季の差が激しいことが分かったと言って良いと思う。子どもたちが川遊びをしたいこの時期に、木道付近では6300コロニー/100ccだった。すべてが有害な大腸菌とは言えないが、やはり子どもたちには川遊びをしたあとは、よく手足を石鹸で洗うことを勧めるべきだ。

さて、流量である。測定日前の7月中の雨量が少なかったが、今日は火の橋下で、111ℓ/秒と多めだった。その前の多雨だった時の地下水のストックが湧き出ているのでは、と、嬉しい想像をしてしまう。

これを書いているのは、7月30日。練馬では、昨夜は時間40ミリを超す雷雨。神戸市の都賀川の鉄砲水で5人の命が奪われた。痛ましい。東京の呑川でも、同じような犠牲者が出た。地理的背景はそれぞれ違うが、川の上流での集中豪雨が鉄砲水を起こした点では共通している。都市河川に限らず、山間の川でも河原のキャンプが突然の増水で流されることはよくあった。

川で遊ぶ時の、万が一の危険はよく頭に入れておかなければならない。日本の川の宿命である。白子川でも水文的背景は違うが、越流下水の突然の大量流入がある。突然の大雨で、あの井頭橋上の下水吐け口から真っ黒な下水が濁流をつくる。子どもたちには「突然大雨が来た時は、上がれ！」と、これからは白子川の素晴らしさと同時に教えなければならない。

そして、全国の河川づくりは、これで良いのか、改善策は何かを、利便だけを求める社会づくりへの猛省も込めて点検していく必要があると思う。河川用地を切り詰めた宅地開発が元凶の一つのようではある。

「新河岸川流域 身近な川の一斉調査」に協力しました

白子川源流での流水量 (上流での湧水量の移り変わり)

本田 純

6月8日(日)

新河岸川の支流20河川以上、測定箇所250カ所以上で「第20回身近な川の一斉調査」がおこなわれ、我が会も10名参加して協力しました。

大泉南小学校の先生2名も参加してくださいました。ちょうど総合学習で白子川学習を担当されている最中で、子どもたちへ川の正確なことを伝えたいという気合いが感じられました。

先生方、ありがとうございました。

協力を始めてから8年目になります。昨年の調査結果では、井頭公園から中島橋までの水質は、「水質偏差値60以上の、湧水等のきれいな水の川」に分類されました。

今年も梅雨らしい雨量に恵まれて、水量はたっぷりあり、水質は良好でした。

11月に報告会が開かれて、報告書に載ることになります。

今回の測定結果の速報をお伝えします。

通し番号	測定地点名	時刻	気温	水温	pH	EC(μ S/cm)	COD	NO ₂ -N	NH ₄ -N	透視度(cm)
235	井頭公園	9:40	22.5	16.9	6.2	236	0	0.005	0.2	125up
236	日の出橋	10:20	19.8	16.1	6.4	233	0	0.005	0.2	125up
237	中島橋上流側	9:30	21	18	6.9	234	0	0.01	0.2	125up
238	新橋戸橋	10:10	22.9	18.2	6.6	240	0	0.01	0.2	125up

今年は、日の出橋がもっとも水質が良かったようですが、その他のポイントもきっとランキングの上位に入るでしょう。適度に雨が降り、湧き水に恵まれていさえすれば、大変水質の良い川であることが、今年も証明されそうです。



また今年も、オプションとして「溶存酸素量」の測定器具が配布され、ゲットしてきました。水中に解けている酸素の量を計ることができます。どのポイントも10ppm以上という最高値を示していました。魚達は3ppm以下になると苦しくなるようですが、この点でも白子川の水質は優れていることになりました。

なお、付け加えさせていただきたいのは、年々参加者が少なくなる傾向で、今年は各ポイント2〜3名でかろうじて実施できました。各ポイント4〜5名で担うとすると、20名の参加は必要です。

魚がのぼりやすい川づくりを考える～に参加して 永井 薫

太古から、回遊魚は太平洋日本海の大海原を北から南へあるいは南から北へ、そして、遡上魚は川(湖沼)から海へあるいは海から川(湖沼)へ、嘗々と泳ぎ回り、子孫を繋いできました。

それが、ここ 50 年程の間に、私たち人間の限らない欲望と人口の増加を背景に、水は治める対象となり、日本の国土を流れる大半の川に人の手が入った。その結果、遡上魚の本来の“魚道”が失われ、人工の“魚道”が出現しました。

魚道とは、魚の遡上が妨げられる箇所で、遡上を助けるために川に設ける工作物、のこと。ということは、魚道は治山治水の申し子であり、正に、遡上魚にとっては、“^{しじょう} 祖上の魚江^{うづかい} 海に移る”ということわざを地でを行った工作物と言えるようです。



さて、6月28日(土)、新河岸川流域川づくり連絡会が主催する、「川づくり見学会」に、菅沢代表と参加して参りました。見学会の開催は、①継続的に活動を行うことで、②川づくりへの市民の継続的な関心の醸成、団体間における円滑な情報交換・交流を促進させることを目指し、③各川づくり活動の充実に資すること、を目的にしており、今回で15回を数えるもの。

当見学会は、白子川源流・水辺の会にとって、アカデミックな体験学習の場として、会員の知識向上の場として、そして、流域で活動している諸団体との交流の場として、重要且つ貴重な位置づけとなっています。

今回のテーマは、【魚道の見学会～新河岸川流域の各地における事例より、魚がのぼりやすい川づくりを考える～】で、「行政・市民協働の川づくり事例」としての黒目川を皮切りに、柳瀬川、東川、北川、空掘川と、東京と埼玉の境を行き交う川の魚道をめぐり、都市を流れる中小河川における「魚がのぼりやすい川づくり」の現状を学んで参りました。

そして、交流会では、魚がのぼりやすい川づくりに実際に関わった専門家である君塚芳輝氏から、各河川に合った魚道のあり方についての講話を拝聴し、市民の方がたや行政の方たちとの意見交換を通して、親睦を深めて参りました。

今回の見学会では、我が“白子川”と“魚道”について、あらためて思いを馳せる機会を与えていただきました。我が白子川の源流部界隈には、縄文遺跡や貝塚が数多く発見されており、遺跡から掘り出された縄文土器には、貝殻を文様にした土器が見受けられます。

この貝殻文様の縄文土器から更に想像を膨らませると……、縄文時代の源流部には、白子川と江戸湾を自由に行き来しているアユやウナギ、ヌカエビやスジエビ、モズクガニやカジカが所狭しと泳いでいて、縄文人たちは、“江戸前の魚介類”に舌鼓を打っていたのかもしれないと……。

さて、ここで現状に戻ると……、白子川の下流域(白子橋付近)に1箇所、落差が2メートルほどの段差があつて遡上できません。

白子川をめぐる課題を、またひとつ抱え込んでしまった見学会でもありました。

第一回 竹炭づくりの報告

田中 麗子

6月1日、心地よい風が吹く快晴の天気の中、水辺の会第一回の炭焼きを行いました。行かせていただいた静岡県駿東郡長泉町立「桃沢少年自然の家」での炭焼き初体験から3ヶ月経ち、確かこうだったはず！という記憶をたどりながらの活動となりました。

13時

みどり広場に集合。前もって切り出しておいた竹をオイル缶に入る大きさに切りました。

また、鈴木(安)会員の知人よりいただいた廃材となる古い電柱をまきにするべく、こちらも割っていきます。のこぎりもなたも、日常生活で使うことがないので、体が慣れるまで四苦八苦しながら楽しみながらの作業です。

途中、渡辺さんの臨時の竹工作教室も始まり、グランドゴルフのゴールを造っていらっしゃいました。のこぎり・なた共、同じ道具を使っているのですが、このような使い方ができるのか、という新しい発見になりました。



14時

点火。竹をつめたオイル缶を火にかけていきます。(今回は2缶作りました)途中、火の加減をみながら、燃料を足していきます。このときに、冷却用の穴も掘っておきます。

火にかけしばらくすると、もくもくと湯気が出てきます。その後、ガスとなった煙が出始め、ここに着火した火を皆で確認することができました。



14時40分

火から下ろし、オイル缶のキャップ口をふさいで、掘っておいた穴に入れ上から土をかぶせます。これは完全に空気を遮断するためと、熱せられた炭を冷やすため(そのままだと燃え出して灰になってしまう)だそうです。



15～16時

出来上がりを待ちます。子供たちは広場を駆け回ったり木登りしたり、大人も歓談、酒盛り(?)としばしの休憩。

16時

穴から取り出します。上の土を掘っていくと、ほのかな炭の香りがしてきます。一同ドキドキしながら蓋を開けると、真っ黒な竹炭が出来上がってました!

焼きが足りず、一部未炭化のものもありました。原因は・詰め込みすぎ・火力不足があげられます。

とはいえ、初めての竹炭、今回は80点くらいの出来だったのではないかと考えています。



このような形で第一回竹炭は終了しました。丁度、定例活動と同じくらいの時間帯で行うことができました。今後は定例活動時に平行して行う予定とのことです。秋に行うころには、休憩時に焼きいも・焼き栗等できるゆとりを持った活動ができるようになるといいな～と思っています。

竹炭づくり講習会に参加して

永井 薫



2月3日(日)、菅沢代表と若手の田中麗子さん
と3人で、静岡県駿東郡長泉町立桃沢少年自然の家(以下、自然の家)主催“竹炭づくり講習会”に参加して参りました。

当日は、深夜からの大雪による寒さと、4時半起きという夜明け前の暗さも手伝って、何とも心細い状況でしたが、新幹線に乗る頃には、既に遠足気分には浸っていました。

自然の家は、三島駅から北西(富士山)の方向路線バスで50分程の山間地にあり、職員4名、非常勤4名の計8名により運営されている、子どものための宿泊所付の学習施設です。

今回の講習会への参加は、自然の家 HP「竹炭づくりの活動記録」がきっかけでした。水辺の会で考える“短時間で手軽に楽しめる竹炭づくり”は、自然の家の“ドラム缶による3時間で竹炭が焼きあがるオリジナル製法”にピッタリだったという訳です。詳しい資料を依頼しましたところ、「資料も送るが、兎にも角にも一度講習会に参加してみませんか」とのお誘いを受けた次第です。

現地8時半集合。ガイダンス終了後、炭焼き会場である“こんべいとう”という、広い庭の角に建てられた威風堂々とした塔へ移動です。

スタッフの方々のおとりはからいで、竹を割るところからスタートしました。いよいよ作業開始です。

▼ドラム缶に竹を並べる

①かまど役のドラム缶は、立てた状態ではなく横にします。それは、竹を入れる一斗缶が2缶横並びに入り、しかも観察しやすく、高さがないので火の勢いが回りやすいからです。

②竹は、伐採直後ではなく、10日以上乾燥させたほうが水蒸気による爆発が起こらず、仕上がりがよいとのこと。ただし、乾燥した期間の異なる竹を同じ一斗缶に入れないことが重要です。

竹割りで注意することは、竹の幅を均等になるように、太い竹なら8つ割り、中くらいなら4つ割り、細い竹なら2つ割りにして、節をとり除くことです。そして、直径が5cm程度ならそのままでもいいのですが、竹の空気が膨張して爆破しないために、必ず、節ごとに穴を開けること。

③次は、割った竹を一斗缶に詰めます。竹は立てるわけですが、大事なことは、一斗缶の中で温度が高温かつ均等に回るように詰めることで、炭の仕上がりがムラにならないために目一杯詰め込まず、肉厚のものは外側に肉薄のものは内側におくことがコツです。

決め手は、一斗缶当たり3本程度の竹の長さより若干短めの鉄輪(鉄製の筒)を、割った竹の間に挿入することで、鉄筒の中の熱せられた高温の空気により、全体の温度が一定に保たれるという説明でした。④いよいよ点火です。竹を並べたら一斗缶の蓋をしっかりと閉め、注ぎ口の蓋はあけたままの状態にして完了。ドラム缶に丸めた新聞紙を入れ、焚きつけ用の薪をくべて点火します。角材が勢いよく燃え出したら、炭化の工程へと進みます。

▼炭化工程

- A 9:35 一斗缶をドラム缶の中に2つ並べて吊るし、入缶作業完了。
- B 9:40 一斗缶の開口した注ぎ口から、ものすごい勢いで白い煙(これは水蒸気)が、立ち上りはじめる。
- C 9:45 水蒸気の勢いが急に止むと、竹の成分あるガスがユラユラと出始める。そのガスに角材の炎が引火して、美しい文様を刻みながら40~50cmの炎となって燃え始める。この炎は、真っ赤な炎とは異なりガスの種類や出方によって文様が小刻みに変化する。加熱を続けると、ガスが薄い黄色から青っぽい色へ変わり、無色となって安定する。また、火炎放射器の音を小さめにしたゴーという音が、注ぎ口からガスの放出終了まで続く。
- D 10:15 ドラム缶から一斗缶を取り出し、一斗缶の注ぎ口に蓋をして、空気の流入を止める。
- E 10:25 穴を掘って一斗缶をすっぽり埋め、空気を遮断して冷却する。



一連の作業の中で気を使う作業は、CとDです。まずは、一斗缶の中に火が引火しないように、ガスの放出を見守ること(ガスの放出を確認)と、ドラム缶から一斗缶を取り出すタイミング(ガス放出の終了を見届ける目)ではないかと思いましたが、炎は、オイル缶を包み込む程度に薪を補給し続け、できるだけ全周囲に平均した炎を上げることが重要とのこと。

▼炭とのご対面

私たち受講生は冷却時間の間、ドラム缶の残り火で薩摩芋を焼いたり、ランチをご馳走になったりして、竹炭の出来上がりを心待ちにしていました。そして、“こんぺいとう”へ集合(12:15)して掘り起こし作業に入ったのです。すっかり冷え切った一斗缶は、生の竹を入れたときに比べて、若干軽い感じがすると共に一斗缶を通して聞こえる音質が、濁音から清音というのか軽やかとなり、しっかりと“炭の手応え”を感じるものでした。

さて、ご対面！ 不揃いではありましたが灰にはならず、ちゃんと炭が現れました。参加者は互いに一斗缶を覗き込んで、健闘を称え合う姿がみられました。そして職員から、「東京から来られた永井さんのグループに特別、職員が焼いた竹炭もお持ち帰りいただきましょう」と言われ、紙袋に山盛り“テイクアウト”して参りました。

▼今後の竹炭づくりの取組み方

今回、当講習会に参加して良かったことは、桃沢流竹炭づくりが、“安定した竹炭づくり”であると確認できたこと、そして、それを水辺の会のメンバー3人が体験できたことです。それにしても、一斗缶の傷みは激しく、使用回数は2回が限度とのこと、このあたりも今後の課題です。

さて、この原理でいけば、大きめなフルーツの缶詰の缶をドラム缶に見立て、一斗缶は茶筒を利用して、例えば“割り箸炭づくり”も可能かも……。桃沢流竹炭づくりを基礎として、応用次第でもっともっと楽しく、そして、我が水辺の会にマッチした竹炭づくりへの発展も可能だという確信を得ることができ、本当に貴重な一日でした。

自然の家のスタッフの方々に、心より御礼と感謝を申し上げます。そして、菅沢さん、田中さんお疲れ様でした。

アニバーサリーの保谷



14 July 2008 画 池野

大泉に越した頃の話 その1

池野 明男

私が大泉(現在の南大泉)に引っ越した頃の思い出などを何回かに分けてお伝えしたいと思います。

*

私たち一家、両親と新世帯は約40数年前、都心の文京区駒込曙町から「練馬のチベット」といわれていたこの地に転居しました。(一部省略)

私は、ここへの転居は最初から大反対で、両親に猛烈に抵抗し、3、4ヶ月は、作家の佐藤春夫ではないが『田園の憂鬱』をかこっておりました。

その理由の一つは・・・・(以下次号)

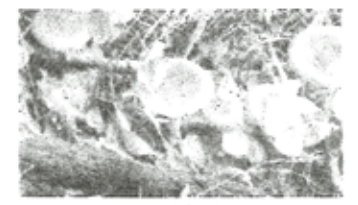
*

この絵は、昭和36,7年頃の保谷駅南口の風景です。思い出して描きました。

キノコを楽しむ!

タマゴタケ

鈴木 一彦



テングタケ



タマゴタケ

タマゴタケは、毒キノコのベニテングタケの仲間で、テングタケ科のキノコです。ですけれども、食菌で良いダシの出るキノコです。真っ赤な傘で、下に白い壺があり、この壺が卵のようなので、タマゴタケと云うようです。

毒キノコのベニテングタケは、シラカバなどの林に多く発生しますが、タマゴタケは雑木林に発生します。

タマゴタケは、傘が赤のみですが、ベニテングタケは赤い傘の上に白いイボが点々とつきます。

数年前に、二度採取し食したことがあります。確か9月の上旬に青梅線の小作駅(拝島から4つぐらいさき)で降

りて里山の大荷田丘陵で採取しました。ウドンだったかソバだったかの具にして煮込むと色がハダ色のように変色します。とても良い汁が出ておいしかったです。

キノコは秋だけではなく一年中出ます。

春は春シメジ、5月上旬にはシイタケ。キクラゲは、3月頃から芽を出し、5月頃に採取出来ます。タマゴタケは、9月上旬ですので、8月下旬から様子を見に行かないと見過ごしてしまいそうです。その他、10~11月には、ムラサキシメジやエノキタケが、昔は石神井公園に春秋2回数年間ヒラタケが出ました。大変美味でベストテンに入るキノコです。

キノコ探しや春のスプリングエフェメラルで、カタクリ、一輪草、二輪草等の芽生えから花を楽しみ、身近な自然を楽しむことの幸せを感謝し楽しませていただいております。

大泉はイイナー!、白子川や井頭川の森などの森が多く、キノコ探しが楽しみです。

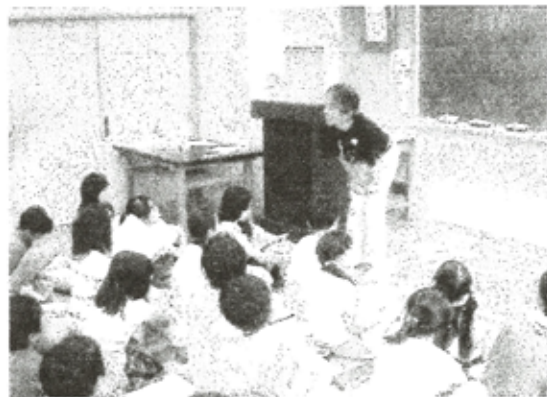
(備考)スプリングエフェメラルとは、春先に咲くカタクリなどのように5~6月頃には枯れて種も落ちてしまうハカナイ春の花のことです。

5月上旬に、大泉南小学校4年生の先生から「今年も白子川学習で協力をお願いしたい」との依頼をうけた。まず、先生方に最新の情報を理解していただくために、生き物たちの画像と、川を巡るまちづくりの発想の転換「総合治水から総合利水」を訴えるスライドショーをお見せした。先生方の理解が、子供たちに伝えたいことの第一歩となりうると考えたからだ。

川を見ての子どもたちの理解とは、そのままでは漫然とせざるを得ない。それが子どもなのだから仕方がない。そこで、子どもたちの視線に写ったあらゆる手がかりをもとに、どう私た

ちの理解に近づくヒントを示すことができるかが鍵になる。原動力は子どもたちの好奇心と想像力だ。先生の提案で、今年は、中間まとめまで先生が指導され、子どもたちの興味、関心が深まったところで、疑問や関心について答えることにした。前日には、子どもたちの質問がファックスされてきたが、多岐にわたるものでインターネット情報も参考にした。

当日は4クラスを横断して編成された「水質」「生き物」「歴史」「流域」に分かれ、菅沢、本田が2グループずつ各1校時を使って応答した。どんな質疑応答か、ごく一部を紹介しよう。



Q 湧き水はいつから出ているのですか？

A 湧き水は、10万年前から始まった富士山の噴火の歴史と関係しています。富士山の噴火で火山灰が降り積もってこのあたりの地形ができました。ある時の火山灰は粘土になる性質をもっていました。その上に水をよく通す関東ローム層になった火山灰が積もりました。たまたま井頭公園の所がくぼみになりました。こうして粘土質の上に溜まった地下水は、一番低い井頭公園あたりに集まったわ

けです。最初の湧き水が流れ始めた時期ははっきりしませんが、5万年前くらいかな。

Q 今と比べて、昔はどんなだったのですか？

A 川幅は1~2メートルで、川面は今よりずっと高く水もきれいだったので、子どもたちは手軽に水に入って泳いだり魚を獲ったりできました。また川に沿って網の目のように水路をつくり、田んぼができました。

Q 湧き水を飲むとどうなるのですか、飲めるようにするにはどうしたらいいのですか？

A そのまま飲むと確実におなかをこわします。細菌やバクテリア、ミドリムシやアメーバなどの原生動物がウジャウジャ棲んでいるから。一度火にかけて沸騰させれば飲めないことはないけど、それらの死骸もいっしょに飲めますか？ また、高性能な濾過器でこしたら飲めますが、勇気がいらしますね。「きれいな水」とは「あらゆる生物にとって棲みやすい水」ということです。

Q 白子川は地球上の水のどのくらい・・・

A 超難問です。海水や湖、地下水はのぞいて、地球上の河川の水だけで2120立方kmという資料がありました。白子川の水量は、全長10km×平均川幅の0.008km×平均水深0.00015km=0.000012立方km。したがって、地球上の河川の水量2120立方km÷白子川の水量0.000012立方km=176,666,666.6666、出ました。世界の川の水の1億7千7百万分の1の量でした。

今回の第8回「白子川源流まつり」でも、彼らの発表のステージが待っている。楽しみである。

今年も助成金が決まりました

《練馬まちセン活動助成事業》

(財)練馬区都市整備公社練馬まちづくりセンターは、区民が住み続けたいと思えるような地域環境と豊かな地域社会実現のために、区民のまちづくり活動を支援しています。当会では昨年に続き応募した結果176,000円が決定しました。(昨年170,000円)

*

当会の19年度収入内訳は、総会議案書のとおり会員90名からの会費収入が130,000円、助成金が170,000円、源流まつり協賛金(地元商店等からの)が90,000円、講師謝礼金40,000円、白子川グッズの売上金が45,000円でした。

助成金が、重要な金額であることがわかります。

*

さて、私たちの会はどんな位置に居るのでしょうか？地域や社会とは無縁の、個人的な限られた人達だけの楽しみを目的とした活動団体ではありません。白子川という“公共物”に取り組む私たちの会は、公共性が高い活動を行なっています。よって、この助成金をしっかりと受け止め、堂々と、有意義な活動に使わせていただきたいと思います。

*

まちづくりセンターには、今年も感謝しています。

菅沢

第8回 源流まつり

川風にあたりながら、白子川とこの町のことを語りませんか。

10月12日(日)

12:00 より

募集中!!

ご自慢のデジカメ写真、俳句、短歌、書画などを会場に展示します。

東谷まで 3921-2521

東京都「河川ボランティア表彰」受賞!!

平成19年度より、東京都建設局による、「河川ボランティア表彰」制度が実施されてます。河川事業への功績が顕著であると認められた団体・個人に対して送られるものです。

このたび、当会が表彰され、7月29日午後、都庁都民ホールで表彰式が行われました。

これもひとえに、会員と地域のみなさん、行政、会の設立当初からご指導くださった他団体、活動資金を助成くださった諸団体・法人のおかげです。ありがとうございました。

同時に、次の4団体も表彰されました。
程久保川を考える会／調布の自然学習ボランティアグループ／さつき会／NPO法人空堀川に清流を取り戻す会



前列右から2人目菅沢代表



南大泉 5 丁目の花き農家、高橋豊治さんから 2 回目
“昔の白子川周辺の話”は、7 月 5 日(土)午後、
蒸し暑いなか、参加者 9 名、井頭橋から開始した。

白子川の記憶

②井頭橋～火の橋～松殿橋～緑橋

菅沢 恵子

マルバヤナギの前 この辺りは《弁天池》とか
《井頭溜》《井頭の弁天池》《井頭池》・・・と、どれを
言われても、誰もがわかったようだ。水は自然に
しみ出ている、湧いていたのは火の橋からだ。

池のまわりは杉林で、それが七福橋まで続く。
七福橋は大泉二小が出来た時につくられ、その
通りを《新道》と呼んでいた。けれどこの橋は、水
が出ると水没して、遠まわりしなければならぬ
ような橋だった。

小さな石の《やけ弁天様》は、杉の木の根元に
祀ってあったが、改修工事で誰かが持っていっ
てしまった。「古いものはみんな捨てちゃった、今
だったら大事にとっておいたんでしょけど」と、
豊治さん。

西岸は一帯が雑木林で、地主さんは 10 年に
1 回くらい木を下から伐っていた。その木は、薪
や炭にするために、バカボウといって 45 センチ



ほどの決めた長さに切り
揃え、10 本まとめて 1 ポ
(1把)にする。だいたい抱
えるほどで、縄をなつて二

重に結わく。木を伐る人の冬の手間取になった。

この辺りの杉やケヤキは生育がいいから、売
って何かの費用にしたし、カシは常緑樹だから、
風よけ・日よけとなった。今はもう杉の木は 1 本

もない。

現在、区の天然記念物に指定されている 2 本
のマルバヤナギは、雑木林の中にあつて、当時
はぜんぜん目立たなかったから、豊治さんに言
わせれば「運がいい」木になる。マルバヤナギの
根元は水がなかった。

とにかく、池のまわりは雑草がすごくて、雑草
の根が張って、その下はズンズン水が流れてい
ても、池は広がっていかない。それでも、雨の量
で池の大きさが違ってくるから、真っ暗な時、
酔っぱらった人が、うっかり自転車のままとび込
んだこともあつた。

生きものたち 四つ足ではイタチ・・・。鶏小屋に
入って、のど元ガブリで生き血を吸った。イタチを
捕まえたら大変だぞーなんて言つた、屁の臭
いは体にしみ込むから。あとは、シマヘビ、ヤマ
カガシ、野ウサギ、フクロウ、タカとか、ヒバリは
年中あがつていた。

子どもたちは川のエビを餌に、フナ、ドジョウ、
ウナギなど、よく魚捕りをした。あとは、アマツド
ジョウ(ホトケドジョウ)、タガメ、イモリ、ミズスマ
シ、ゲンゴロウを相手に 2 斗
ザル持って遊んでいたが、
うっかり亀を捕まえてきたら、



「そんなの戻してこい！」なんて、親に叱られたものだ。というのも、結核を患った人が、願いごとや名前を亀の甲羅に書いて、お酒を飲ませて、川に放すこともあったからだ。貝はシジミ、カワニナ…、ホタルも飛んでいた。

火の橋の手前、片側はマコモ、もう片側はヨシが生い茂り、足はズブズブ入るし、昼間でも光が見えないから、年寄り子どもに「ダメだ、ひとりで行っちゃ、迷子になるぞ」と言って、行かせたくなかったところだ。

火の橋周辺 水車を利用する人たちが、水位を一定にするために堤防をつくった。そして、両脇の田んぼにも水を流していた。でも、米はいくらも穫れなくて、ふだんは麦飯、雑穀、オカボ(陸稻)。オカボはポロポロでまずかったから田んぼのメシが食べたくて、もうちょっと下流の方では、七夕の短冊に、《朝まんじゅう、昼うどん、夜は金歯で米のメシ》と、サトイモの葉に溜まった水を集めて、墨ですっては必ず書いたものだ。“金歯で”とは、お金持ちになってということ。ほかに、ソバも食べたし、うどんも打った。「小麦は年に1回だったが、麦踏みがいやでいやでねえ」。水車で製粉してうどんをつくった。

なんと、日照った時の《雨乞い》を橋の上で行っていた。代表の人が、大山あふり神社へ竹筒を持って行って水をもらってくる。その水を白装束の人が弁天池に注ぎ、檀家の人々が太鼓をたたいたりしていると、ほどなく雨が降ってくる。次の日は《おしめり正月》といって、ご馳走をつかって仕事を休む。なんのことはない、雨が降りそうになると、神事を始めたという訳だ。今でもそうだが、諏訪神社には昔から神主がいなかった。

田んぼは粘土質だから、田植えの時は女性が入っちゃいけないと言われていた。その田植

えは5月末だったかもしれない。農事はすべて親から子へと伝えられていた。たとえば、コブシが咲いたらサトイモを植えるとか…。

川は火の橋から妙福寺まで蛇行していた。

当時の生活 農繁期や妙福寺のお会式(昔は11月19、20日)は、学校の授業は午前中で、午後帰り。お会式の日は、霜のとけた道を、足元シャーシャーいわせて、赤飯の待つ家へと急ぐ。この日は、檀家が赤飯を炊いて重箱につめ、檀家でない家々に持っていったのだ。ずいぶん喜ばれたし、子どもたちもとても楽しみだった。



霜どけの畑を自転車
で通る時は、誰もが竹の棒
を持っていて、泥よけとタイ
ヤの間につまった泥を落と
しては走ったものだ。

ふだん、家の燃料としては、クヌギや栗などの《くずっぱ》(落ち葉)とか麦わらで、薪は高級品になる。三時のおやつはサツマイモやジャガイモ。家では、醤油、味噌、漬物、まんじゅう、だいたいなんでもつくっていたから、買うものといったら少なかった。カマス(藁むしろの袋)に入った塩と、年に1、2回の黒砂糖、あとは、お会式でコンニャクやがんもとか、お煮しめの材料を買うぐらい。漬物は4斗樽に1年分漬けていたから、すっごく塩辛かった。

橋の名前「火の橋」は「木の橋」を聞き違えてつけられたのでは、と豊治さん。当時の橋は、9尺の丸太を隙間あけて並べ、クルマが通りやすいように土をのせたものだった。おそらく、台所に貼ってある「火の用心」の火の字でも当てたんじゃないかなあと。その土を子どもたちは棒で突っついて、川に落としては大人におこられた。

もの名前は気楽に決まるし、当てた漢字もいい加減。その隣の「松殿橋」の漢字もビミョウだ。土地のことばで雑木林は《ヤマ》といって、西岸は《マツドのヤマ》と呼んでいた。だから、橋の名前も《マツドの橋》となった訳だが…。

東岸には、満州へ行くための《女子開拓団》があった。のちに、見返寮^{みかえり}という母子寮になる。



今でも NTT の電柱に、「見返」の文字のみえるプレートがある。戦後まもなくの話、皇族が来られるということになって、一斉に肥溜め^{こぼり}はフタされた。

緑橋周辺 「緑橋」の左側、細い道をくねくねと

1 分程、以前、小さな踏切があったところを見に行った。前回、線路向こうから眺めたところだ。道は塞がれ、きわにマンションが建っている。

その辺りもそうだが、マツドのヤマからも東岸からも、石斧や土器がたくさん出てきたが、畑仕事には邪魔だから、みんな捨てていた。小学校の先生のところに見せに行ったら、先生は何に使うかなど丁寧に教えてくれた。

西武線はすでに通っていて、線路はいい遊び場であり、駅への近道でもあった。

井頭橋までの戻りは、豊治さんが吹く草笛を聞きながらであった。「この会に入ったおかげで、昔のことを思い出すきっかけができた。感謝します」と、嬉しいことばをいただいた。次回は、どんな話が聞けるのか、楽しみがふくらむ。

前号、妙福寺境内の鬼子母神にザクロの木が植わっていると記載しました。そのあとでわかったことですが…その木は、メダカ博士こと大塚重雄会員が4、5年前に植樹したものだのです！ ザクロの実は、鬼子母神が食べたという人間の肉と味が似ているらしいこともあって、よく植えられるとのこと。大塚さんはザクロの生長を気かけ、何くれとなく面倒をみているそうです。



こぶし広場の紹介

こぶし広場管理委員長 網谷 真

白子川の七福橋から井頭交差点方向に行くと、こぶし憩いの森があります。六月から地主さんのご厚意で、隣接した土地が「こぶし広場」としてオープンしました。ベンチや多少の樹木がある以外は平らな地面で、運動するにはもってこいの広場です。毎日、ボール遊びやかけっこする子どもたちで賑わっています。

六月七日には管理委員会主催で、グラウンドゴルフ、ドッチボール、フットサル、ペタリングなどのスポーツイベントが行われ、地域の多くの方々とスポーツを楽しむことができました。

これからも、地域の子どもたちが安全に元氣よく遊べるように温かく見守っていきたいと思います。随時、イベントも開催していく予定です。



「白子川整備検討会」

渋井 良郎

ジージには田舎がありません。最愛のター君（貴昭、小三、7歳）も同じですね。ジージは自然がとても大事だと思っています。ター君は鶴川に住んでいるから、ジージの家より少しはましかな？

ター君が2歳のとき、東京都第四建設事務所の人がジージの家に来て（03.7.30）、東映橋と比丘尼橋公園の間、大雨が降っても良いように、川幅を広げたり、深くしたり、兩岸に車が通れるようにしたり、それと、この場所は土地が沢山取れたので川の近くまで降りたり散歩道を作ったり出来るので、住民の皆さんと色々な人達と相談したいとお話がありました。

話し合いは、第1回（H15.9.18）、第2回（H16.2.2）、第3回（H16.5.13）、第4回（H16.9.3）、第5回（H17.2.4）、第6回（H17.4.26）があり、その後何度か打合わせをして今年の5月（H20）に大体のこと

が決まりました。皆さんの自然を大事にしたいとの思いが、少しでもター君達に残せたら大人達は嬉しいと思っています。

話し合いのメンバーは、住民：東大泉二丁目町会、大泉六丁目町会、みつはし自治会、東大泉団地自治会、大泉住宅共栄会、白子川源流・水辺の会、白子川と流域と水環境を良くする会、三原台まちづくりを考える会、専門委員：東京理科大学、土木研究センター、東京学芸大学、行政：練馬区（土木部、環境清掃部、河川部）、東京都第四建設局の人達でした。メンバーは、7年も経つと随分替わりました。特に、行政は2～4年で異動があり全員替わりました。

工事の予定ですが、ター君が11歳の中学1年生になる頃には終わると思います。楽しみにしててくださいね。

第8回定期総会報告

菅沢 博

6月15日に当会の定期総会が開催されました。総会の詳細は、全会員に配布済みの議案書の通りですので、活動方針を要約して掲載します。



1. 定例活動 毎月第4日曜日午後
 - ①水質等調査
 - ②清掃活動 西武線より上流の河道清掃
★宮本橋～緑橋間のどこかに下りられる
階段設置を練馬区に切望する。
 - ③生物観察
2. 第8回白子川源流まつり、10月12日午後開催
3. 竹炭づくりと土壌調査取り組み開始
4. 大泉南小学校の総合学習への協力
5. 雨水浸透枮の普及、緑地、農地の保全、下水道の改善
6. 聞き取り調査：白子川の原風景と文化の検証
7. 「白子川副読本」発刊費用の準備金積立開始
8. 白子川体験イベント、出前白子川講座
9. 「白子川美術館（絵はがき）」の販売
10. 白子川への道順表示の『町中案内板』

11. 井戸調査の準備
12. ウェザーステーション稼働開始
13. 他団体との交流、協力
14. 会報（「源流通信」）発行 年間3回発行予定
15. ホームページの運営
16. 4/10を「浸透の日」と定める。
17. 「練馬みどりの機構」に団体加盟（継続）
18. 井頭橋の会の掲示板管理

ウキヤガラ

カヤツリグサ科の植物で、以前は井頭橋下流の菖蒲の群落の中に見られたが、2年前から井頭池の中の雨水吐の周囲に見られるようになった。

高さは1.5mほどになり、7月から10月に茎の先端に、2、3個の茶色の小穂(花)が付く。まっすぐに伸びた茎が特徴。カンガレイと比較して、茎、葉とも柔らかい。



会員募集中!!

白子川の水辺環境の保全活動と一緒に参加しませんか。
毎月第四日曜日 1時半から、大泉井頭公園内にて川掃除等を行なっていますのでお立ち寄りください。



- | | |
|---------|------------|
| ◎正会員 | 年会費2,000円 |
| ◎世帯会員 | 年会費3,000円 |
| ◎法人会員 | 1口2,000円以上 |
| ◎通信購読会員 | 年会費1,000円 |

会のホームページを
ご覧ください。

http://www.geocities.jp/sirako_river/



私達の活動内容、白子川源流の状況
貴重な湧水が湧いていること、水質、
生き物、四季の風景などをわかりやすく
掲載していますので、ぜひご覧ください。

(「白子川源流・水辺の会」と検索)

編集後記

ある夕方、散歩に出た。文理台公園の前を通ると、年配の女性が行き交う人に何かを尋ねてる。そして、不安そうに私にも尋ねてきた。交番はどこですか、誰も知らないんです。私どうすれば良いんだらうと。◆保谷駅前の交番に案内した。道中、どこまで帰るのか尋ねると、西大泉・・・と、はっきり何度も繰り返す。◆交番で事情を話すと、忙しいからと、地図帳を渡されてしまった。仕方無く、自宅まで送り届けた。◆私もそうであったが、住人でも、意外と地理を知らない。私もこの女性のような場面に遭遇しないとも限らないことを思うと、無性に不安な気持ちになってしまった。(渋谷)

※この会報は年3回発行しています。

発行	白子川源流・水辺の会 代表 菅沢 博 03-3923-8430
事務局	練馬区東大泉 6-36-4-301 副代表 本田 純 03-3924-9181
編集	渋谷 瞭司
題字	宮本 沙海